



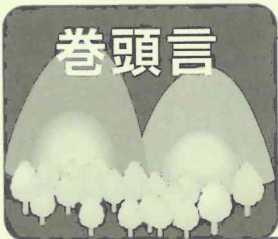
# 子ども樹木博士 ニュース

2013 - 12

No. 53

子ども樹木博士認定活動推進協議会

## 巻頭言



## はじめの一步

林野庁国有林野部経営企画課 国有林野総合利用推進室長 石原 聡

私が生まれ育ったのは東京の下町で、樹木は街路樹のシダレヤナギか、隣のおじいさんが育てる盆栽くらい、近くの小さな公園にもツバキなどが街路樹のように植えられているくらいで、森林どころか、樹木や植物にもほとんど縁のないようなところでした。

しかし、幸いなことに、近くに伯父の家があり、小学校の理科の教師をしていた植物好きの伯父が庭で色々な植物を育てていました。大きなイチジクの木があり、夏になると冷やした実を食べさせてくれました。また、どこから来るのか知りませんが、ゴマダラカミキリが飛んで来ていました。

伯父の家の庭にはミカンとサンショウも植えられており、アゲハチョウが産卵に来ました。時期になると、ポツンと生み付けられた小さな黄色い卵をミカンやサンショウの葉ごと採って、プラスチックの水槽に入れて蝶になるまで育てました。エサは庭のミカンやサンショウの葉を採ってくるのですが、4 齢 5 齢のイモムシになるとエサも大量に食べるので、サンショウの葉ではとても間に合わず、ミカンの葉をバサバサむしって与えたのですが、育てるのは 1 から数匹なのに、学校から帰るとエサの葉っぱを食い尽くしているということもよくありました。このようなことが続くと、個体が小さくなって、蝶も小さなものになってしまう

す。今考えると、大変酷な育て方をしていたな、と反省です。

その後、学校の教師に連れていかれた山歩きにはまり、趣味が高じて今の職業に就きましたが、その根底には子供の頃の昆虫や庭木などの植物との触れ合いがあったのではないかと、思います。子供の頃の体験はとても印象強く残るもので、未だに当時のアゲハチョウとサンショウ、ミカンは鮮明に覚えています。

「子ども樹木博士」は子どもたちが樹木に触れ、その名前や特徴などを知ることによって、森林に親しみながら関心を深め、森林や自然について学ぶ、はじめの一歩となる活動で、森林体験、森林環境教育活動を広げる大変意義深い重要な取組だと思います。

私は大きなイチジクの木のある庭で、植物や昆虫と触れ合うことで、はじめの一歩を踏み出し、森林に魅力を感じて森林につながる仕事に就きました。「子ども樹木博士」が全国にたくさん生まれることは、資源小国である日本の、貴重で再生可能な資源である森林を何百年、何千年も引き継いでいく力になってくれるものと思います。未来を担う子どもたちを育てるためにも、引き続き「子ども樹木博士」の取組を推進していただくことを心から期待しております。

## 目次

巻頭言	はじめの一步	林野庁国有林野部経営企画課 国有林野総合利用推進室長	石原 聡… 1
特集 I	「フロラ調査」をやってみました	一般財団法人自然環境研究センター研究員	吉村 妙子… 2
特集 II	季を見て森を見る楽しみ (四季折々の森から) —その③ 初冬の森—	森林インストラクター	小菅 智彦… 3
事例報告 I	屋内イベントで子ども樹木博士認定活動	愛知県シェアリングネイチャー協会理事長	青山 裕子… 4
事例報告 II	関さんの森で子ども樹木博士認定事業	関さんの森を育む会	木下 紀喜… 5
シリーズ	東南アジアの木々たち (22) —乳液の出る端整な木—	自然と植物の観察会 TREECIRCLE	梅本 浩史… 6
子ども樹木博士質問コーナー		茨城県植物園緑のインテプリター・森林インストラクター	堀内 孝雄… 7
事務局だより	平成 25 年度の子どもの樹木博士認定活動の実施状況等		8

特集Ⅰ



# 「フロラ調査」を やってみました



一般財団法人自然環境研究センター研究員(森林インストラクター) 吉村 妙子

高尾山近くの森で毎月1回の観察と調査を始めて5年が過ぎました。名前を知っている植物が随分増えましたが、分からないものも多く、「もっと名前を知りたい」、「どんな植物なのか分かったらもっと楽しい」と常々思っていたところ、専門家の方の協力を得てフロラ調査(植物相調査)を実施することができました。

今回行ったフロラ調査は、ルートを決めて歩き、出現する植物の種名を片っぱしから記録していきます。本数や広がりといった量は問わないので、植物に詳しい方の手助けがあれば初心者でもやりやすいシンプルな調査です。「沢→斜面→尾根」、「広葉樹林→針葉樹林」、「新植地→50年生」など環境が変わった時や、開花や結実がみられる種があれば、備考欄などに記入して参考情報とします。

記録用紙に図鑑、双眼鏡(樹木の観察にはもってこい)、ルーペなどを持って調査開始。最初は新しいものが次々に出てくるのでほとんど進みませんが、次第に新しいものが減ってきてスピードアップします。一度名前を確認できた種は、次に出てきても不思議と「あ、これはさっき記録した〇〇だ」と分かるようになります。

通常の観察会では花や果実などその時期に特徴的な部分や、たまたま出会った昆虫類などに注目するこ

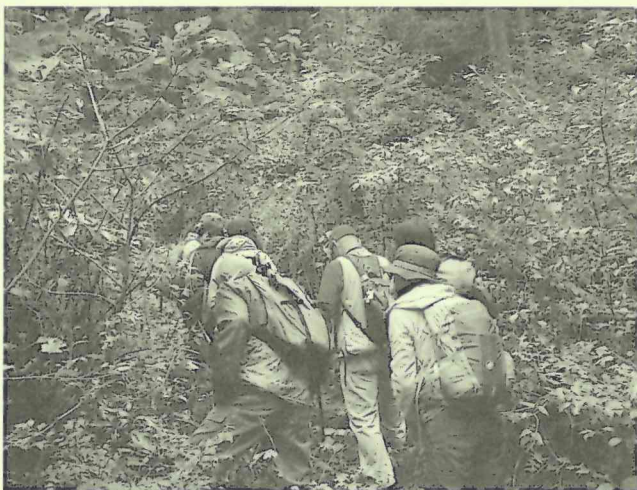
とが多いですが、フロラ調査では植物の種名同定にフォーカスし、花や実だけでなく葉や枝のつき方、葉脈や鋸歯、芽、葉の落ちた痕といった部分までしっかり観ます。匂いは観察会でも重要な要素ですが、同定でも大事なヒントになります。おかげで普段は気づかなかった特徴に気付いたり、逆に花や果実以外の特徴の無さに悩まされる種類もありました。

今回の調査では沢沿いにルートをとったので、こうした場所を好むチドリノキ、ミツデカエデ、イタヤカエデなどカエデ類がたくさん確認できました。チドリノキは1枚の葉だけ見てもカエデの仲間には思えませんが、葉の付き方を見れば対生で納得です。沢沿いでも、ギャップの明るい場所にはイギリヤクサギがまとまって生えているなど、微妙な環境の違いが見て取れました。

この日は約4時間の調査で、木本、草本、シダ植物あわせて175種を数えました。同じルートで春にまた実施する予定で、春にしか確認できない植物がまた加わることになります。ちなみにルートは同じでも、調査の都度、一から種名を記録していきます。

こうしてできた一覧表が「フロラリスト」になり、自治体などが発行している地域のリストが入手できれば照らし合わせてチェックすれば、さらに確実なものになります。フロラリストはその場所の自然環境を把握するための基本情報で、ここに環境による出現種の違い、季節ごとの開花・結実状況、何回目の調査で確認できたか、といった調査時の参考情報を加えれば、森づくり計画や観察会、普及啓発などに活用できる独自のリストも作れます。数年おきに実施すれば、森づくり活動によって種数や出現種に変化があるかどうかモニタリングすることもできます。

山仕事ボランティアの方が調査後に、「下刈りで切っている植物も、名前が分かると親しみが出てくる気がする。」と話していらっしかったです。フロラ調査も子ども樹木博士も、樹木を観察して名前を覚えるという体験を通じて、森林や植物に対する愛情と科学的視点を醸成するのだと実感しました。



フロラ調査の様子。同じように見えた植物も次第に区別がついてきました。

## 特集Ⅱ

## 季を見て森を見る楽しみ（四季折々の森から）

## —その③ 初冬の森—



森林インストラクター 小菅 智彦

木枯らしが吹き始めると、森の様子は秋から冬へと変わります。赤や黄色に彩られた秋の森はやがてモノトーンの冬の森へと移っていきます。しかしどちらの季節も森の中で生命の営みが行われていることは言うまでもありません。初冬の“子ども樹木博士”では季節の変化に着目して、樹木の冬支度に興味をつなげていきます。

落葉樹は葉を落とすことで寒い冬を越えようとしませんが、その準備の段階で葉の色が変わります。木には根、幹、枝、葉を繋いで水分や栄養分のやりとりをするライフライン（道管・師管）が通っているのですが、秋になって気温が下がり始めると、落葉樹は葉のつけ根のところでこの管を自らシャットダウンしてしまいます。この現象は“離層”と呼ばれ、枝と葉の流通が遮断されるので、葉には水分や栄養分が行かなくなり、糖類などの光合成の産物は葉に溜まり、やがて葉は枯れ落ちていきます。

この時、葉の緑色の色素（クロロフィル）も分解されてしまいますが、その過程で光合成によって作られた糖類と反応して、緑葉の時にはほとんど含まれていなかった赤い色素（アントシアニン）が生成されることがあります。離層によって葉から枝への輸送ルートが遮断されているため、この色素が葉に蓄積されていくことで葉は赤く染まっていきます。これが、イロハモミジ、ニシキギ、ハゼノキなどに代表される“紅葉”の仕組みです。

一方、葉にはもともと黄色の色素（カロチノイド）が含まれています。葉を赤くする色素を作らない樹種では、緑色の色素が分解されてしまうと、今まで緑色

に隠れて目立たなかった黄色が私たちの目に強く視認されるようになります。これが、イチョウ、カツラ、ポプラなどに代表される“黄葉”の仕組みです。

こうした紅葉や黄葉の現象は、一般的には夏の日射量が多く、適度で断続的な降水量があり、昼夜の気温差が大きいほど綺麗に色づくといわれています。最近では10月中頃まで続く猛暑や集中豪雨の多発などの影響で、葉が枯れずに丸まってしまったり、色づきが悪くなったりする年も多くなりました。

さて、落葉樹がすっかり葉を落とした後も、森の物語は終わりではありません。葉の落ちた痕を葉痕といいます。カラスザンショウやオニグルミのように大きな葉をつける樹種では葉柄も太いので、葉痕に残された管の断面の形状や配置がはっきり確認できます。まるで人や動物の顔のように見えて思わず微笑んでしまいます。今度は木々の枝先や葉痕の脇に新しい芽が出来ているのを探してみてください。これらは冬芽と呼ばれ、春に葉や花として開くための準備を整えて休眠することで冬を過ごします。よく見ると、アジサイやムラサキシキブのようにむき出しのままの芽もありますが、コナラやケヤキのように鱗状のジャケットで覆われた芽が多く、中にはコブシやハクモクレンのように毛皮のコートをまとったもの、トチノキのように粘液でべとべとするものなど、冬の寒さや乾燥から身を守るための対策も様々です。

皆さんも初冬の森の中で、おおいに木を観て森を観て、子供たちにその魅力を伝えていただけたら幸いです。



イロハモミジ（紅葉の代表的樹種）



イチョウ（黄葉の代表的樹種）

事例 報告 I

# 屋内イベントで 子ども樹木博士認定活動



愛知県シェアリングネイチャー協会理事長 青山 裕子

愛知県シェアリングネイチャー協会は、愛知県内でネイチャーゲームの普及を行っている団体です。

8月8日(木)に名古屋市名東区役所主催「エコフェスタ名東2013」に出展し、子ども樹木博士認定活動(以下「認定活動」という。)を実施しました。当協会では毎年、緑地公園で認定活動を行っていますが、来場者が多い屋内の出展場所での実施は初めてでした。

3.6メートル四方の広さに認定活動や生きものクイズ、標本展示、クラフト、活動紹介などを配置し、真ん中でネイチャーゲーム体験を行いました。ネイチャーゲーム体験を中心に他の活動も双方向に体験できるようなレイアウトです。

ネイチャーゲーム体験は机に並べた15種類の葉をカルタに見たて、スタッフが見せた葉と同じものを参加者が選んでタッチする「木の葉のカルタとり」を行いました。「木の葉のカルタとり」を始める前に子どもたちは机に並べた葉に触ったり匂ったりしながら、感覚を使って葉と親しみました。コナラやアベマキは、ドングリ標本を参考に実の種類も覚えめました。また、ドングリを食べる生きものについても説明をしました。

スタッフは読み札代わりに子どもたちが覚えた葉の特徴を楽しそうに伝えたり、木の実を見せたりしながら、ゆっくりと1枚の葉を見せます。合図とともに子どもたちはこれだと思った葉にタッチをします。その後、正解した葉の名まえを子どもたちに教えます。

「木の葉のカルタとり」を5~6回体験し、自信が

いてきたころを見計らって認定活動を進めました。認定活動では、画用紙に貼られた15種類の葉を1枚1枚見ながら名まえを書いていきます。はじめは渋々やっていた子どもがだんだんと真剣になっていきました。同時進行で他の子どもたちが体験している「木の葉のカルタとり」の方に耳が向いていたり、途中でドングリ標本を見に行っています。名まえのヒント探しをしているようでした。その後は、クラフトをしていた親子や会場を一巡して戻ってくる子どもなどが参加するようになりました。

企画段階では、室内イベントという環境では葉を観察する機会がなく、会場のにぎやかさで認定テストに集中できないのではという心配がありました。しかし、ネイチャーゲームで葉の観察を行い、好きな時に認定活動に参加できるという流動的な形をとることで15名の参加がありました。そのかわり、イベント開催時間中は認定活動専属のスタッフを配置しなければなりません。

当協会では毎年、環境イベントに出展していますが、子ども樹木博士認定活動も実施可能であることがわかり、緑地公園での実施以外にも継続しようと考えています。子どもたちが身近な場所に生えている樹木と親しみ、名まえを覚えることで樹木の種類と人間を含む生きものとの関係まで考えられるようになってくれたらと願っています。



## 事例 報告 II

関さんの森で  
子ども樹木博士認定事業

関さんの森を育む会 木下 紀喜

千葉県松戸市内にある通称「関さんの森」は、JR常磐線の新松戸駅から歩いて10分程、住宅に囲まれた市街地の中にあります。森の所有者の関家はこの地に約230年前から居をかまえる旧家で、江戸時代後期に建てられた建物とともに古木に囲まれた屋敷林、農園など、現在では貴重な緑の塊です。

平成6(1994)年に先代の関武夫氏が亡くなり、相続した姉妹は両親が大切に守ってきた屋敷林をそのままの姿で残したいと考え、その条件を受け入れてくれた埼玉県内の公益法人に1.1haの森を寄付しました。隣県の公益法人に森を寄付したため、地元でその管理を担う組織が必要となり、平成8(1996)年に「関さんの森を育む会」(以下「育む会」という。)が設立されました。

育む会では、寄付された森を主体に関家の所有する屋敷、梅林、近くにある森などを「関さんの森」として管理しており、所有者の思いを生かして「都市に残る里山を、未来の子供たちのために」を目標に活動を続けています。春はタケノコ掘り、初夏は梅の収穫や販売、夏はタケを使ったソーメン流し、秋から冬にかけては焼き芋、カヤの実入りパン焼き、自然観察会など、四季を通じて森に親しむ活動を行い、毎年2千人

程が参加しています。そして今年3月には1.5haの森が都市緑地法による「特別緑地保全地区」に指定され、森は末永く残ることになりました。

今年の8月4日(日)、(公財)都市緑化機構が運営する「花王・みんなの森づくり助成」事業として、子ども樹木博士認定事業(子ども樹木博士)を実施しました。育む会としては2回目となる子ども樹木博士です。

誰しもテストは苦手と見え、テストを伴う子ども樹木博士も敬遠されがちです。3年生以上の小学生を対象に募集した事業は、チラシの配布はもとより松戸市広報、地元の小学校などで勧誘したにもかかわらず予定人員に達せず、親の同伴、兄弟で参加する2年生を加えて実施しました。講師の森林インストラクターと樹種と案内ルートについて何度か現地で検討の上、20種の樹木を決定。選定樹種の枝葉、幹などを撮影し、カラーA5判のテキストを作成しました。

当日は暑い日でしたが、9時半に会場に集合し、時間割、注意事項などの説明の後、各班に分かれて樹木観察会に出発。観察場所は屋敷内と屋敷生垣、森は低い場所で観察できる林縁を、助手が付き添って20種類の樹木を順番に案内しました。後でテストがあることから、子どもたちは真剣に説明を聞いていました。

1時間ほどで観察が終わり、テストの予習と休憩のための自由時間を取り、屋敷の外の樹林地にあるテスト会場に移動しました。会場には4つのテーブルの上に樹木の葉や実などの付いた小枝が番号をつけて並べられてあり、会場の脇には出題樹種の一覧表を掲示。考查の時間は15分間、どこから観察するかは自由としました。付き添いの親は心配そうに遠くからわが子のテスト風景を見ていました。

テストが終わると直ちに採点し、結果の講評をした後、育む会の代表から子ども樹木博士認定証を一人ずつ渡しました。採点結果は、さすがに2年生は低かったが平均12点、満点が1人いました。

子どもに付き添って参加した父兄から、大人を対象にした樹木の説明を希望する者もあり、いずれ大人の樹木博士も実施してみたいと考えています。



## シリーズ

# 東南アジアの木々たち (22)

## —乳液の出る端整な木—



自然と植物の観察会 TREECIRCLE 梅本 浩史

人々の持つパワーの熱気があふれかえる東南アジアの都市部。お店の店頭では見たこともない食材や雑貨が所狭しと並び、無数に連なる屋台では現地の人々に混ざって、色んな味や香りのする美味しい料理が食べられます。

そんな賑やかな東南アジアの都会の喧騒に包まれながら、町々で出会う木々を観察してゆく旅。

さて、今回ご紹介する樹木は、「シチヨウジュ」(七葉樹)と呼ばれる樹高20~30mほどになる常緑樹。とても端整な姿形をしたキョウチクトウ科の樹木です。和名は、七枚の葉っぱ(単葉)が輪生する特徴を捉えたもの。

同じ木でも生える地域や国が異なると、呼名も違ってきます。例えば、英名ではミルクウッドパイン(Milkwood Pine)と呼ばれていて、これは、木を傷つけると乳液が滴り落ちる性質に由来しています。

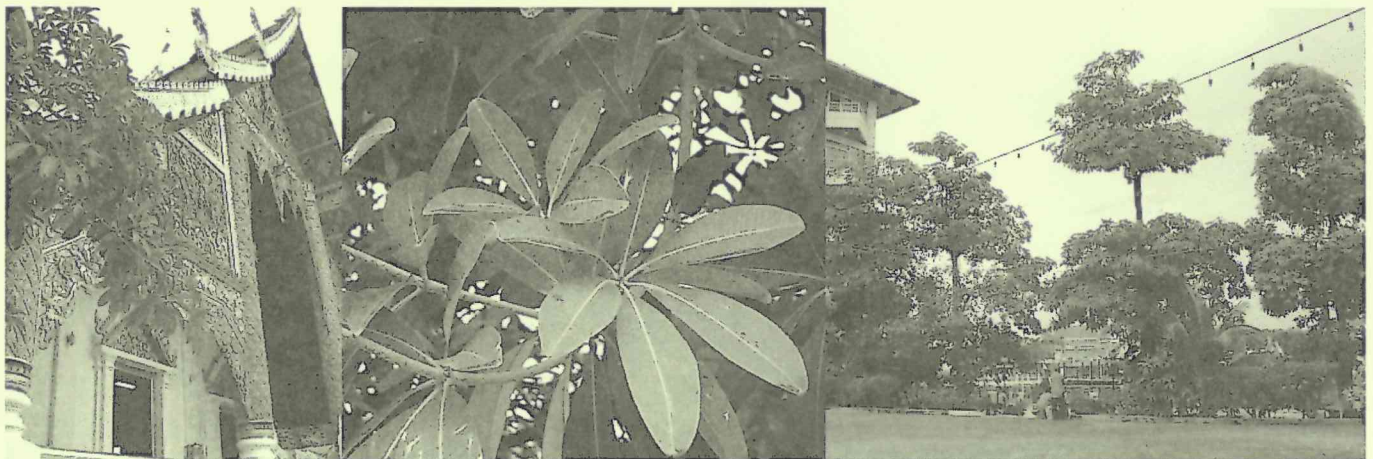
また、タイ仏教では、この樹木を神聖視しており、一般にパヤーサッタバンと呼んで、寺院の境内などに植栽し尊ばれています。

他に、タイ北部ではティーンベット(直訳すると鴨足)。マレーシアではプライ。台湾や中国では黑板樹、乳木。ベトナムではホアスアと呼び、庭公園樹や街路



樹並木などに広く用いられています。

秋の開花期を迎える頃、ベトナムでは「ホアスアの並木」から強く甘い香りが漂います。この秋の情景を歌った曲『ハノイの秋を想う』にも、そんな様子が優しく穏やかに歌われています。「ハノイの秋、秋のハノイ…、風に漂うホアスアの香り…」と。



# 子ども樹木博士質問コーナー

茨城県植物園緑のインタープリター・森林インストラクター 堀内 孝雄



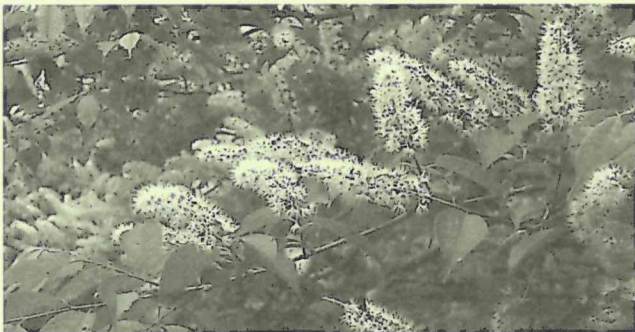
**Q** ブラシ状の花をつけるウワミズザクラというサクラの仲間があるそうですが、どんな木ですか。

**A** サクラと言えばソメイヨシノやヤマザクラが思い出されますが、穂状に花をつけるウワミズザクラはサクラらしくないサクラの仲間です。開葉後に1年枝の先に総状の花序を出して多くの密生した白色の花を咲かせます。花を見ればまさに5弁のサクラの花と気づきます。この花は、サクラの仲間では咲く時期がソメイヨシノやヤマザクラよりも1ヶ月近く遅いので、あまり人に気づかれないようです。花の盛りによく見れば、迫力のある見事な花です。

ウワミズザクラという名前は不思議に思われます。牧野新日本植物図鑑には、ウワミゾザクラ（上溝桜）の転訛したものであり、昔、亀甲で占いをを行った時、この材の上面に溝を掘って使ったので上溝ということがあります。

ウワミズザクラの若い果穂や未熟な果穂を塩漬けしたものはアンニンゴ（杏仁子）と呼ばれ、日本料理などで珍重されています。赤く熟した実は果実酒に利用されます。

ウワミズザクラによく似たイヌザクラは花序枝に葉がないので、花序枝に葉のついたウワミズザクラとは区別できます。穂状の花をつけるサクラの仲間には、冬でも葉を落とさない常緑性のサクラがあります。茨城県を北限とするリンボクや、バクチノキなどです。



ウワミズザクラ（茨城県植物園・那珂市 2008.5.4）



イヌザクラ（ひたちなか市 2008.5.5）

**Q** 真っ赤な実が目立つドクウツギは猛毒と言われますが、どんな木ですか。

**A** 海岸砂丘や荒地などで見られるドクウツギは、梅雨時に真っ赤な果実をつけることや、3本の葉脈が目立つ葉を対生しあかも複葉のように見えることなどから、一度目にすると忘れられないでしょう。昔からこの植物、特に果実は猛毒として知られています。そのため、イチロベエゴロシ（一郎兵衛殺し）、オニゴロシ（鬼殺し）などの別名があります。

果実には甘みがあり、昔は子どもが食べて死亡する事故が多かったといわれます。黒熟した果実は毒成分が抜けているといわれますが、確認はされていませんので、絶対に口にはいけません。毒成分は猛毒のアルカロイドで、コリアミルチン、ツチンなどの有毒成分を含んでいます。人が食べると吐き気、けいれん（痙攣）、呼吸困難に陥り、場合によっては死に至るといわれます。茎や葉も有毒です。ドクウツギは、トリカブト、ドクゼリと並び日本の三大毒草として挙げられています。

果実は鳥に食べられて、種子が散布されます。鳥に食べられる黒紫色に熟した果実の多汁の部分（残存した花弁）は毒成分が消失していますが、種子（瘦果）には毒成分が含まれています。動物の体内でどうなるか分かっていませんが、種子は体外に排出され種子散布される仕組みです。ドクウツギの根には窒素固定の根粒が形成されるので、やせ地でもよく生えています。

ドクウツギは日本に1種だけ自生する固有種ですが、この仲間（ドクウツギ科ドクウツギ属）は世界に10数種あり、アジア、ニュージーランド、中南米、地中海などに隔離分布していることで知られています。白亜紀の古赤道に沿って分布しているという前川説、大陸移動説などがありますが、その謎は今でもナゾのままのようです。



真っ赤に色づいたドクウツギの果実  
（国営ひたち海浜公園 2012.6.24）

# 事務局だより

◆平成 25 年度の子ども樹木博士認定活動の実施状況  
平成 25 年 10 月末までにご報告等をいただいたものです。

実施日	実施団体等	都道府県	募集人員	参加人員	参加者
4.14	森林インストラクター会“愛”	愛知県	30	23	子ども～大人
4.29	篠山市農都整備課	兵庫県	30	40	親子等
5. 3	21世紀の森と広場「子ども樹木博士」認定事業実行委員会	千葉県	22	22	親子等
6. 2	駒ヶ岳・大沼森林ふれあい推進センター	北海道	30	12	小学生以上
6.13	NPO 法人森遊びサポートセンター	北海道	15	15	小学5年生
6.27	NPO 法人森遊びサポートセンター	北海道	34	34	小学5年生
6.30	森林インストラクター会“愛”	愛知県	30	80	子ども～大人
7. 7	駒ヶ岳・大沼森林ふれあい推進センター	北海道	30	10	小学生以上
7.21	(株)日産クリエイティブサービス	神奈川県	10	7	小学校低学年
7.27	東京大学附属演習林樹芸研究所	静岡県	30	19	親子等
7.28	野田の樹木を見て歩こう会	千葉県	30	58	小学生以上
7.28	(公財)山梨県緑化推進機構	山梨県	15	41	親子等
8. 3	藻岩山観光運営委員会	北海道	30	15	親子等
8. 3	(独)森林総合研究所	茨城県	60	16	小・中学生
8. 4	駒ヶ岳・大沼森林ふれあい推進センター	北海道	30	6	小学生以上
8. 4	関さんの森を育む会	千葉県	20	8	小学2～6年生
8. 4	森林インストラクター会“愛”	愛知県	30	20	子ども～大人
8.11	(公財)山梨県緑化推進機構	山梨県	15	17	親子等
8.18	たかつき環境市民会議 里山グループ	大阪府	30	19	小学生
8.23	関東森林管理局高尾森林ふれあい推進センター	東京都	40	27	親子等
8.23	真庭森林組合	岡山県	28	28	子ども～大人
8.27	東京農工大学農学部	東京都	68	68	小学生
8.30	(公社)岡山県緑化推進協会	岡山県	52	52	みどりの少年隊
8.31	東京農工大学農学部	東京都	48	48	子ども～大人
8.31	(株)日産クリエイティブサービス	神奈川県	15	9	小学校低学年
9. 5	岩手北部森林管理署	岩手県	26	26	小学5年生
9. 8	駒ヶ岳・大沼森林ふれあい推進センター	北海道	30	11	小学生以上
9.12	NPO 法人森遊びサポートセンター	北海道	27	27	小学3～4年生
9.14	NPO 法人やまぼうし自然学校東京支部	東京都	20	14	小・中学生
10.13	稲毛海浜公園「子ども樹木博士」認定事業実行委員会	千葉県	50	11	小学生
10.29	篠山市農都整備課	兵庫県	20	29	親子等

(注) 報告等が参加人員のみの場合は募集人員も同数として、また募集人員のみの場合は参加人員も同数として整理

◆実施結果のご報告をお願いいたします。

実施団体等の皆様へのお願いです。平成 25 年度の子ども樹木博士認定活動の実施結果につきまして、まだご報告いただいていないものがございましたら、お手数をおかけしますが、ご報告いただければ幸いです。報告用紙はホームページから word の用紙をダウンロードできます。また、報告用紙がない場合は、①実施団体名、②実施年月日、③募集人員・参加人員、④対象者・実施場所等を記載したメモで結構ですので、FAX 又はメールなどによりお送り願います。(O)

**子ども樹木博士ニュース**  
2013 年 12 月 1 日 No.53  
子ども樹木博士認定活動推進協議会

〒112-0004 東京都文京区後楽 1-7-12 林友ビル 6 階  
一般社団法人全国森林レクリエーション協会内  
TEL : 03-5840-7471 FAX : 03-5840-7472  
E-mail : kodomohakase@shinrinreku.jp  
URL : <http://www.shinrinreku.jp/kyokai/kodomokyou.html>  
<http://www.shinrinreku.jp/kodomo-n/main.html>